51

わが国におけるパラリンピック競技の父——中村　裕博士

小林　晶
福岡整形外科病院

1964年開催された第32回東京オリンピックで，本邦初のパラリンピックが開催された．この時，パラリンピックを東京に誘致する先頭に立ったのは中村　裕博士（以下敬称略）である．案外このことは知られてなく，マスコミの報道も少なく，やっと2018年8月にNHKがドラマを作成して紹介したに過ぎない．顕彰の意味を含めて誘致に大きな貢献をした中村の偉業を紹介する．

中村は1927年大分県別府市に生まれ，1952年九州大学医学部専門部（以下九大）を卒業，翌年同大学整形外科に入局，天児民和教授の薫陶を受ける．主として，筋電図と当時本邦では未だ珍しかったリハビリテーション（以下リハ）の研究を始めた．元来，機械いじりが好きで器用でもあり，熱中する性格だったので直ぐ頭角を現し，1960年にはリハの教科書を天児と共著で出版する．1958年九大より国立別府病院整形外科医長として赴任した．先輩で九州労災病院の内藤三郎院長が，1957年英国のSir Ludwig Guttmannの脊髄損傷（以下脊損）の業績を紹介していた．その示唆もあり，中村は1960年2月から英国Stoke Mandeville病院（S.M.）のNational Spinel Injury Centreに留学する．ここには1948年以来Guttmannが世界で初めて脊損患者の治療と社会復帰のためのスポーツ導入を行っていた．ここで直接指導を受けたことが中村の半生を変えたのである．

S.M.病院では脊損のリハにスポーツを用い，陸上競技場など多数の施設を備え，1948年第1回S.M.競技大会を開催して以来，1952年からはオランダが参加して国際競技大会の組織ができていた．医療では例えば回診は理学療法士，作業療法士，医療体育士，ソーシャルワーカー，養護教師が医師，看護師と共にグループで行っていた．組織的なスポーツ活動は専門家を交え，障害を考慮して行われ，重度障害でも6か月の訓練で85%が社会復帰するという，瞠目すべき成果を知った．障害後の復帰には残存機能の強化を楽しくスポーツで行うという，わが国の医学界での認識の甘さに中村は衝撃を受けたのである．1960年ローマで開催されたオリンピックを機に，第9回S.M. gameが第1回のパラリンピックとして開催された．

S.M.病院での中村の行動はGuttmann以下職員も注目の的で，患者の診療はもちろん医療リハ，スポーツ活動を始めとし，必ずスケジュールを正確にこなし，夜間は倉庫に蓄積された資料の山に埋もれながら調査を行った．この調査は診療記録，検査成績（含病理組織），X線フィルム，予後調査を含めた膨大なものであった．演者は1962年7月第11回国際S.M. gameに参加する中村と日本からの初めての参加選手と1ヵ月間起居を共にしたが，早起きの中村の睡眠時間は極めて少なかった．

勤勉な中村の態度はGuttmannを動かし，1964年の東京オリンピックで第16回パラリンピックの開催を打診されたのである．その後のわが国での中村の行動は目まぐるしく，政府を初めマスコミ，財界への直接の働きかけを行った．診療の傍らであったから，大分と東京，関西の距離，交通手段を考えても，心身に亘る疲労は極限まで達した．しかも，国際的交渉・交流まで含めると常人では考え難い行動範囲であった．1964年からは別府整肢園園長を兼任することになり，肩にかかる重荷は増すばかりであった．元来，目的を作って歩いてゆく，立ち止まらない，考えついたら即座に行動する，原点に立ち本音で交渉する，熱意と勇気で体当たりする，そのため常識破りのそしりを受けても常に突破して怯まず開催を実現し，選手団団長として参加した．

中村はその後も日本パラプレジア医学会，国際脊損学会を主宰し，極東・南太平洋身障者スポーツ大会，講師身障者技能競技大会，国際身障者レジャー・レクリエーション・スポーツ大会，大分国際車椅子マラソン大会，「太陽の家」などを創設した．しかし，中途肝炎に罹患し1984年7月23日肝癌のため惜しまれながら死去した．享年57歳であった．